

# 巡航船から見た明治後期の大阪

—上大和橋から松島まで—

相 良 真理子

1903年（明治36）3月から7月に開催された第五回内国勸業博覧会の開催にあたって、同年1月に大阪巡航合資会社が設立され、3月から営業が開始された。当初は、西横堀川の新町橋から湊町と、道頓堀川の湊町から日本橋までの運航だったが、同年9月には、東横堀川、西横堀川、土佐堀川、木津川、道頓堀川、西道頓堀川を航行することとなった。1906年（明治39）8月には大阪巡航株式会社が設立され、淀川と大川、堂島川も航路となった。『大阪市統計書』（1909年）によると、同年の大阪巡航株式会社は石油発動機船76隻を所有しており、船長は60人、機関手60人、水夫65人、乗降所員58人、切符売捌人35人だった。乗客は、1年間で607万4788人だった。巡航船は、1907年頃に最も乗客が多かったが、市電が開通されると徐々に乗降場が閉鎖され、1913年（大正2）に廃止された。



『実地踏測大阪市街全図』（1906年）

1909年（明治42）9月には、『大阪時事新報』に巡航船からみた周りの景色が、大阪の裏側として8回にわたって連載された。記者は、東横堀川の南端にある上大和橋乗船場から、道頓堀川、西道頓堀川、木津川を経て松島までを取材している。本稿では、同時期の道頓堀五座の芝居にも触れながら、川沿いの様子が具体的に記された記事をあげてみたいと思う。

1909年9月10日付には、定員を超えるほどの客が詰め込まれて乗っている様子が、次のように記されている。

船は轟々と客を詰める、定員四十何人は疾とくに通り越して居るに、前のお客さん、さう

広う取らずに詰めてお呉んなはれと云ふ、丸で人間を豚扱いにしちよる

次に、道頓堀川について記した記事を読みみたい。

「どんよりと煤煙に曇つた重くるしい」空の下、「汚れ、悪臭のする、危険な、乱雑な」道頓堀川を船は進む。

川沿いの住居は、「表街の地平線下に二層の所帯」、「一見した丈けで、非常に傾斜して居ることが瞭然と判る」家がある。各層には、「種々雑多の洗濯もの」が干されている。続いて次のように記されている。

女の腰のものまでが、高く南風に戦いで覇を大阪の南部に唱へ、遙かに船中の自分共を睥睨するのだから堪らない

殊に裏河岸住居の人は見ゆる限りの人が皆な裸体である、途ある家から半裸美の、肉の少い顔を出した、人の母と見るには余りに年が若い様であつたが、其の女は之れも真裸にした、三つ許りの子を抱いてゐた、而して船から之れを見上げては別はずに耻かしいとも思はない

これらの記事は、道頓堀川沿いの大和町、宗右衛門町、久左衛門町、二つ井戸町、高津町、東櫓町、西櫓町、九郎右衛門町の様子を記したものである。このうち、宗右衛門町と櫓町、九郎右衛門町は、難波新地、阪町とともに南地五花街に属する花街であり、道頓堀川の両岸には、貸座敷や芝居茶屋などが並んでいた。櫓町の芝居側、すなわち道を挟んだ向かいには、道頓堀五座と呼ばれた五つの劇場があった。浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座である。浪花座は、1904年（明治37）の失火後再建されておらず、仮小屋を建てて活動写真が上映されていた。

1909年9月の道頓堀では、角座で市川右団治が、朝日座で片岡我童が、中座で中村鴈治郎が、弁天座で新派俳優の深沢恒造が芝居をしていた。なかでも、中座では『大阪朝日新聞』に同年4月3日から12月21日まで連載された渡辺霞

亭の「錢屋五兵衛」が、朝日座では『大阪毎日新聞』に同年1月1日から4月29日まで連載された田口掬汀の「猛火」が上演された。両座ともに大入り満員だったと9月13日付の『大阪朝日新聞』に記され、翌日には、主演の中村鴈治郎と林長三郎の舞台写真が掲載された。



『大阪朝日新聞』1909年9月14日付

さらに、『大阪時事新報』9月6日付には、次のように記されている。

「猛火」は北区の大火を当込んだ際物といって可い

此炎々として燃上る猛火の光景を仕打の白井君が発明したと聞ては殊に一見の価値がある

「北区の大火」とは、同年7月31日に起こり大きな被害を出した北の大火を指している。上の文中にある「白井君」とは、松竹合名会社の白井松次郎のことである。同年8月27日付『大阪朝日新聞』に、『「猛火」は時節柄煙火を使用せず電気応用を以て煙火よりも一入美事に見せる工夫をなしたる由」と記されていることから、電気を用いて火事の演出を行ったことがわかる。

次に、西道頓堀川と木津川についてみていきたい。

西道頓堀川では、「角材」が「川の両岸を横領して」いる。この辺りの「川の意義」は、「材木置場と云ふ極く売買染みたもの」である。「両河岸の大方は生活と直接の關係をしてない倉庫だから、仲には随分ひどい名許りの板囲の古ぼけたものもある」「藻屑塵芥水の半ばを掩ふて、而かも半死の鱗が黒い背中を露はした様に、材木の筏を組み浮けてある、狭苦しい、危険極まる、閉塞された旅順口の港口を見た様な所」だ。

また、西道頓堀川と木津川の交わるところにある岩崎町については次のように記している。

岩崎と日本一の富豪と同じ名の付いた町の

河岸裏の汚いこと、場末の致方ない町とは申せ、之では川の大阪も甚だ面目無い

続いて、「和船で大阪へ這入るものには、劈頭第一に目に触れる場所である」とし、日本政府は鉄道のために「停車場と云ふものに注意して、出来得る丈け見えの善い建物を拵えてゐるが、船著と来たら、皆暮れ見捨て、仕舞つて、少しも相手に成つて、肝煎をして呉れぬ」とも記している。整備されていない川沿いの状況が見てとれる。

西道頓堀川の西端を南北に流れる木津川を北上すると、左手に大阪五花街のひとつである松島が見える。松島の貸座敷「東京樓」の様子が次のように記されている。

浴衣の寝間著が腹を返へして干されてある、夫れと並んで女の尻が二つ見える、二人は何か話してゐる様子、夫れに一人は頻りに鏡を見て居る

又一人の女が加はつた、ふつくりと肥えて、万事を苦に病ぬ面構へだ、嬉れしさうに、尻の女に話しかけると、鏡の女迄が一所になつて大きな声を揚げて、キヤツキヤツと叫ぶ、果ては尻の女も二人共立つた、三人は最う何か口に物を入れて、もぐもぐさせ乍ら、欄干に靠れて、川を見る、船を見る、さうして、何か云つては大きな声で笑ふ

この記事に出てくる三人の女性は、娼妓だと思われる。なお、「東京樓」は、西区仲ノ町一丁目十六番屋敷にあった（名倉唯四郎編『改正浪花の華』1903年）。

これらの記事と、写真や地図、統計データを合わせてみることによって、川に沿って建てられた家並みや繁華街の様子、そこに暮らす人々の暮らしを具体的にみる事ができるのである。



巡航船（『明治大正大阪市史』第1巻）

大阪都市遺産研究センター RA  
文学研究科博士課程後期課程在学